一日土談

全

MITSUBISHI BUSINESS SCHOOL
2132
28

28
へ134
2132
28

口演

長崎

東西ニ而ハ不作法ニ候ハヽ
ハヽ
御ゆるし被下候ハヽ
ハヽ
御ゆるし被下候ハヽ
ハヽ
御ゆるし被下

一日土堤自叙

史劇場の不寝番を。嵐来亭と
洋書漫画側そばに。猫と寝ぶ
猫の小判の噂も空こぼれ金猫
乃名乃れ。鐘三つ四つ。乱猫と
重郎うら四ツ。風流の猫の石塔

一そろそろ日も垣根の外へ白拍子一手一振の袖形市一日。桃のうれしや
うそどころ叔父様のおかげ様なのも事もなかろう。起こる
七福せ玉章の雪のかどのいと上げすめばナヨ
のこと申町帷幄の門の道奥遠と云ふ事入会ふ
出雲
鼻冷

猫間中納言。女三の宮の猫
あまた。そばなる柏木。物まゐりて
猫子あるを。御覧じ物を取て
与給ふ。猫ぢやらし。猫の女。寵姫猫。猫の女房。猫の
乃尊。猫ぢやらし。猫の女房。猫の女房。猫の
貴。傾城の見番。猫の眼をこゝろ
迎ひする。猫。猫ぢやらし。猫の左右のない点猫し。
猫舌有れバ猫背。猫の杜子美。
ご清ふも。鹿爵香。猫眠石竹。瞳ゲ如
涅槃会の日。書き落さゞる猫魔の
杖を唐猫と鯉を。猫の左右を清原

漢土に父が猫を彫しに前小敦更
ありあるさまなるよりあひ
そのさまそうぬるかごとくひも
長細の看板に成猫足ハ第七更ず
見臺とも机ともつかぬ深切を
ほりこんく猫を座とこゝろえ猫
て座上より猫ばかり拝むごとくや
世ありまゝ祢こなるこゑの言葉ハ
猫よあべし天竺震旦ハ
ふつゝの異物妖怪有。不審ある
ば執化生。報恩ひ拝。手乃
音を恐怖。毛志

柳(やなぎ)ごおりの千(ち)どりの方(かた)と云(いう)
ば。神(しん)拝(ぱい)をなす。松(まつ)掌(てのひら)ばかり
墨(すみ)をすりて。筆(ふで)をひたし。一貫(いちぬき)
文字(もじ)に書(かき)しは。和泉屋(いずみや)市(いち)郎(らう)
兵衛(べえ)。猫(ねこ)の腸(はらわた)を引(ひき)出(だし)。雑(ぞう)
巾(きん)にて。ぬぐひ。雑巾(ぞうきん)の底(そこ)しれ
ず。作(さく)者(しや)も胃(い)

折(おり)ふしぬれ。恋(こい)情(じやう)の二国(にこく)一同(いちどう)に
大(おほ)なる陽(ひ)蔵(ぐら)もの。すゝぐしやれ。
頽(くづ)唇(れ)落(おち)来(く)。頽(くづ)屋(れ)。今(いま)
土塘(どて)の糸(いと)の行(ゆく)松(まつ)。年(ねん)寄(よ)事(ごと)
ぢゃ。春(はる)のかぐめ。猫(ねこ)の妻(つま)
女(おなご)児(ご)よまで。

五瀬ゝ法して。ひそ

子時
天明八戊申ノ冬十二月

孟陬

内新好書

總目次

○ 齊樂菴堂
○ 通言の原始
○ 名所ゝの濱又
○ 三子遊洛
○ 畫家の名譽
○ 媚家の異見
○ 世人の陰褒
○ 鄙吝數の噂
○ 前骨牌より奥
○ 手ぬくの名

一日之堤

一鰐風雅なる雪の雑 西の影道一かうく
枝毎ゝ戸あく東のそ ふうと巡石そうろう葉うき
和のあ水神されいふぐり自然稲よまり毛ケ戸
竈雑のこゑみ上野の後ふく夜が明くく向よの方が
揖儀進退あ人生くまる揖儀いも毎りおもやく
若あぐし根さし毎ふとこ後大きく進退も
ぐ毎りおしもう長服さし聲花の出立附履そう二人
ほどもん道のまん中こ後よ立そもり

揖 五常ハ行儀へいろ 進 あそこで小通ど 揖 お通と

いふ事うの四皓の内よ有りてこらく 五常 ちがふいう彩くうこと多うけみぐ〳〵と毎うおしやう 哥乃ときあかこやひごこのこれようる 揖 なぐ〳〵ぶえさぜ
今のひうをとうさう着ざの 五 ウ、あうやア 毎いせぐ 揖 ゃ
堺町のう 五 さやバ町のさ 進 先生、尚ごろよの 揖 よ毛重
二枚づてそかさぐせやろ 五 まが能うから 供のりの サア 毎いでのさへ
とてんりふみうこみく 揖 先生おやとの戸をそんく
まりうの戸のおかさをさ 揖 とうく内うう
哥樂 まく〳〵 進 のをま戸 あけ 開くれば人も来すの水鶏
くるる
なうりう くぐうの娘う琴うえ 先生之助う。床の右ふえ盛うう毛医をうく掛軸い

ひうそ酒 宝家机ふ二前まおまくこのせ前
蔭仮きまおあうあどを毛うくとなをこそ
通うその 前 そよい声八揖儀すし
五 揖 違 八、内へこうう 五 供をうをで能うら
毛ちやけうまや。こんな雲ふ毛うと
という借いをう 五 時子先生のお前です
なるまで。客人外聞のりふ 前 いや朝うほ
かく〳〵。着ふをいざやあ〳〵をうの。 進 私と
を整前をそびあうよ 前 毎ちであなさひ。まだ前よ

一義わう。雅波津流香の元祖神代の風俗みやび
我朝文雅の事に有ぐ。今世の
文盲の如く。仮名の外は一字一句
も読ず書ず。只管香を聞て
其名を知るのみ。是を以て
香の徳用を知ず。香の
源氏の巻名を覚ず。香の
名目を知ず。何ぞ香を
聞ん。香を聞ずして
何ぞ香を知ん。
香の名目を知ずして
何ぞ源氏の巻名を
知ん。源氏の巻名を
知ずして何ぞ
香の徳用を
知ん。

雅波津流香の元祖神代の風俗みやび
我朝文雅の事に有ぐ。今世の
文盲の如く。仮名の外は一字一句
も読ず書ず。只管香を聞て
其名を知るのみ。是を以て
香の徳用を知ず。香の
源氏の巻名を覚ず。香の
名目を知ず。何ぞ香を
聞ん。香を聞ずして
何ぞ香を知ん。
香の名目を知ずして
何ぞ源氏の巻名を
知ん。源氏の巻名を
知ずして何ぞ
香の徳用を
知ん。

雅波津流香の元祖神代の風俗みやび
我朝文雅の事に有ぐ。今世の
文盲の如く。仮名の外は一字一句
も読ず書ず。只管香を聞て
其名を知るのみ。是を以て
香の徳用を知ず。香の
源氏の巻名を覚ず。香の
名目を知ず。何ぞ香を
聞ん。香を聞ずして
何ぞ香を知ん。
香の名目を知ずして
何ぞ源氏の巻名を
知ん。源氏の巻名を
知ずして何ぞ
香の徳用を
知ん。

雅波津流香の元祖神代の風俗みやび
我朝文雅の事に有ぐ。今世の
文盲の如く。仮名の外は一字一句
も読ず書ず。只管香を聞て
其名を知るのみ。是を以て
香の徳用を知ず。香の
源氏の巻名を覚ず。香の
名目を知ず。何ぞ香を
聞ん。香を聞ずして
何ぞ香を知ん。
香の名目を知ずして
何ぞ源氏の巻名を
知ん。源氏の巻名を
知ずして何ぞ
香の徳用を
知ん。

なさる 揖 ヲ 侯もかう 儀 荷ぶまつへ仕りて ニクガ 高世へ 宅座 その
紙袋 物 ぶまつ 物 て す。 ちかく 後の事 粗末 の事 さ。 つくり が 果 子
ぶまつ 物 て そ の 小 物 を 吟 く 出 さ 前 も 細 る ま す。
ざ と の 生 こ る 物 さ 五 な り わ ど 粗 末 も 時 の 興 よ る う 若 や
若 や 座 つ ぶ て 本 物 ち の 事 物 の 本 人 さ ま
む し の 狂 言 も 名 人 に て も 有 こ て。 と い う 男 か く 寸 丸
元 廣 の つ る ど ん 事 も 有 れ 荷 も 名 人 さ。 り 猫 の つ ぬ く
い わ り ま そ ど 正 親 町 公 通 の つ の 座 ま て さ。 猫 の ま ま

ひ ま あ る よ う に 二 度 の。 か と の や う な れ も 名 ふ う に 人 と い う 狂 言
う 出 さ で や て 進 ハ ア と れ で 解 せ ま す。 五 時 ふ 云 下 の 狂 名 へ
揖 ハ 張 林 梁 五 フ ウ ぶ う ま く 狂 言 狐 神 及 ハ ア と 名 ふ 有 ふ
と ふ ま さ 揖 ア ノ 云 れ や ハ ア の 狂 言 さ 進 梅 澤 で ハ ど ざ う が 雲
雷 か 安 の る ハ 主 前 と の ろ さ。 主 家 の 母 納 と 梅 澤 と に ふ う ど
よ ど ざ 有 ふ て ど ぱ の 前 ハ と の 座 を 下 ふ 立 ま べ か ろ ど ハ ア
て 云 事 か と 生 て な あ れ ハ ア ろ や 揖 と の 無 ふ ど 世 ア
時 こ の さ 進 私 も 此 十 夜 八 月 ハ ア の 狂 言 を ハ ア 海

珠里智

前 ム、なんと其の高名さ 進 ヤどうぞ
土戸へ湯の釜 五 フゥう其の
どうも有さうなお ヤ祢へか 前 イヤいくのさ 進 追追 祢祢へか先
来るて。 進 ヤあまその里物断 ヤわァ祢へか。先ず後 探 疑 を名合
中て。むゥ ヤおゥ出来 と。 粒 斉 を 孫 ぐ ヤ御 ま す 念
安兵衛ひ ヤろひ ヤおゥ 本 て 其 り ひ ヤ ま せ ヤ。 ま ヤ お 高 ヤ て
ろ ヤさのが 高 筆 祝。 おいろ 大 ヤ こ ぞ ろ ま す 「君 ヶ 代 ハ 千
代 い 幸 ま ろ 我 ま ろ ど ヤ と 中 ろ 御 成 ま ろ ま ろ

月 ま の ま ろ 念
初 ま を お ろ び ろ む ろ 月 ろ 振 ろ 扇 ヤ 取 ヤ
関 東 川 の ろ 角 ハ 一 ヶ 年 ま を 角 田 川
向 東 弘 我 妻 ろ ま ろ 様 の ろ 念
永 連 意
俤 の 月 ろ ち ろ く ろ ま ろ の 節 ろ
春 来 時 ろ
春 の 中 の 町 ろ 〳 〵 郭 公 ま ろ ど ろ お あ ろ 声 を ろ け ま ろ

前 手粗なそよいものさなをきといふ
事も二ツ三ツ物ごとでござる 五 だのお宝もまし
揖 二日向顔のせられ其智をうがつと。ちがう
内ごの愛師上をさ。ホントに侍よおあつた 重 イヤ是い
ほあいさついてこそ浪山神ごとうかがと 前 ちよつ宝な粗末
も一ツ充てのその伝とお下知
ほう。ちよつ 進 二王法の前とお 前 急前とも
陰よ。寧迫前をよむが能ひ
どがいりよさそもさをよろけばされぐとへけとうかが

人気をそといふさ。ハヽ浅せうしが学前ちよつをと
いふ事の物で。ヲヽ其ごとへ何ちよつ行ふ引ゐてる 五 それて事
ふ振よごぜへも 揖 コリヤア何ぢやむづかしい事を言ふ出ごぜへ
ござる 五 きのよ油通侍といふ 又 頑城のちはうの茶漬
有る事ごぜへ事よ 進 八十 又 頑城のちはうの茶漬
の事の延年ち妹ちよ好ごとして有ると 揖 楽 端人ござる

紙で包んだものをいうことばである。

まつら姫 前 契情の詩前に述べた如く肥前松浦の遊女である。

女という歌ふく定家卿の作詩前に

船のおもてのうめのはなうめでさへ花ぞうりのへ折りてこれをさす

是浅妻舟の事をまつら風俗を採りて作れり。又歌の上句

遊女をいふ 哥よ 歌をあつめ 哥よ 歌をあつめ

かくふ学ぶ。酒遊女ふく影ふく 陰の哥よ

又波ふとて又あのようなものをうれしめのようなものを

なさるいふごとく 揖 柱哥よも有ども傾城ふうそこふく

あうそ海のそ魚のまさごのまのうらふく 哥 つまい我恋そ

よむもをかしくあり海のそ魚のまさごとつゞけたるもをかしくあり

さいふ哥よ出るのどや 追 花桜哥 民 唐子も女房が有うの

揖 姫ふく有のふ。あのうちで吉事といふやうなふ死衾ふどそ

すまう唐の世ふ北里といふ有り。昔の世ふ板橋といふが有つて妓

情の事を倡婦と云実也。を青妓といふ 遍 通といふ事

唐ふも有事ふ 揖 有ふ。

孔ふ老ふを 追 通家と云

進なるべきぞうりで二足の通をといふ名が有って 損おさやがれ

五 大通といふ事いつの比よりはじまりしや 損大通といふ事は明和六七の比
いつのまにやらうまれ出たるにや 損大通の人々の働おもしろき安永六酉成
あらといふ事を知る人もなし 損里なれ
のそしなに大通といふ。江府中ふるく流布せ。損ひろひ
すぐ売れかい。まんぐ 遠慮重畳よいろ。世事
大ふ流り也 進又地ごくといふ事ハ 損安永年中よりこふく
安初地のふ極り両名等て地ごくとやく。今のごとく

[illegible]二三日の通をといふハ 損その外をいろ。年寿ういふもの幕
両ごろもとひとをいふ 進小ぬき人をバ 損内気といふ
日ごろ蘇屋うたぐむ 五ちゃんの事ハ 損三味ゑ
よう出ろとバ 進歌舞伎をやかましく 損女もかうど
夜あるれ共内ふ番のやうにふ 損青ふいふ
付ごと則表ろ中へ 五苦ろ両ごハ 損向ふの外を呑かまをいふ事ろ
進第ろそのろハ 損

五 水ふ一條ゑ 横 なぶて 五 ぞ 進 七寺のうら 横 なぐるぶこいふ事 五 ぞ いくすぢ 横 隅田の牛嶋 寺 横 小面うら 五 濱久いふ 進 天橋 進 遠頂香 八 横 ヨウト 合点 ▲ 拍子園場 ぶしや 横 小面うら 五 東福寺ゑ 横 ぶしやの拍子ふくもたぐりまぜ

山ぶき。堺井。のうぜんかずら。やぶ
萱草。百合。ひるがほ。ゆふがほ。
秋のまつり。ぎをん会。花火。
馬鹿ばやし。ぞめき。吉原かけ
書そうさう。ふうそく。空生舞。つぎうけ。
小ざん長局。さん魂稲荷のお祭。
春雨も煙ぶる。ふる雨。
提灯ぜんまい。ぜんまいざ。

山あらし。まつたけ。しめじ。椎がし。
春風。ふっ。なまめく。柳。
春風にふかれ出る。弁
提灯。ぶら〳〵。提灯も
よりもかうもいふ。いろ〳〵の雪の子華。雪の孫枝。山席。山さ
さべ。柳のそのせなり。我子の
漫筆。肝を脱て。春ふあやまり。せるのといふ事まのあつ
なり。仕ふ。吹。春の猿八。秋
五 サア第二のぶぶんの行ら。
吹ふ。春ふ。春ふ。

中ごろ 新吉原 揚屋町 揚屋 升屋 揚屋 茶屋 のまえやう尾山町 十軒 の内 若井 一番
[連] 引舟 の [揃] イヤ 申ぶんござりません
[連] 通ひ路 の [揃] ウ 松の木 不梅 吉ふ豊吉 とのんでござります
[連] 三人連で 二階座敷 まつすぐ。 まつすぐ。 [四] 三ツ 指 不性 さ 在 へ 行 で 後 の
[連] 引舟 [四] 三ツ 指 不性 さ 在 へ 行 で 後 の
[連] 引舟 [四] 三ツ 指 不性 さ 在 へ 行 で 後 の

まう〳〵拙宅の通り。婦人がむこうの
なんで。ホの字の奴をうしろ
妻が足を其儘動かして
[済]そんな事が有るものか。拙宅へ
子共の時からこゝに居て
かゝあ殿を有中ぽかむしやらでも大せうちで追ひ
おきまゝ而すも長尻慶が
三助〳〵といのりぐらい。

[揖]アノ義兵衛のう[五]ウ、そこで若
むかでも喰れるまでゐ移〳〵
おひさうで。あゝ也ふ
いつまで[五]そうも合点がいく移
うあゝ毎も此でなをうの今
順番と申さんぐらゐで
本あると他の事へ移〳〵。

[揖]ひさう修三も喜ばうよくあつた
揖〳〵云ばあゝ今〳〵まで
むかでも喰れるまでゐ移〳〵
おひさうで。あゝ也ふ
いつまで[五]そうも合点がいく移
うあゝ毎も此でなをうの今
順番と申さんぐらゐで
本あると他の事へ移〳〵。

でとめんうち母もこういうく出るうち森五イヤ母さんとそて婦もおさこそ云て
おそこへ出ませはでも二人ものごさおん。婦妹(さうとく)と云みがくてる例(いつも)
のの[揃]そういよのご有(ある)ものさア浅(あさ)さの今(こん)ん母(はゝ)さんの服(ふく)の方(かた)と
ころよおろう。柳屋(やなぎや)半(はん)右衛門(えもん)という母(はゝ)さんを母(はゝ)さん妹(いもと)をお吉(きち)
というく二人(ふたり)ごちのんとりてくらう(つう)やせん色(いろ)ちりつおど例(いつも)て
いるよ。こんん母(はゝ)さんの兄(あに)のおう(ふ)さんの姉(あね)のおりつ(ふ)さんの娘(むすめ)
妹(いもと)のお吉(きち)ごうのこころよ出(でる)くお母(はゝ)さんまでごこへ二社(ふたり)こんのうちよ母(はゝ)さん
ばけ(ばかり)ん今(こん)のお出(でる)そる。[五]いそう娘(むすめ)のお母(はゝ)さんがごせこそうこ

[進]中(なか)屋(や)という酒屋(さかや)の門(もん)までいうこと左(ひだり)への中(なか)ごろ。柳屋(やなぎや)
半(はん)三郎(さぶろう)の妻(つま)くこそる。そうてが四(よ)人(にん)づ参(まい)る後(あと)。佐倉(さくら)
ごろ娘(むすめ)でる。[五]法(ほう)おいうのあるの。[進]よく
おく人(ひと)ごいうく五(ご)うのご[五]ア娘(むすめ)お母(はゝ)さんのおや
ごいうく五(ご)うのご[進]よく
ごいうのんごうくまのお行(ゆく)おいくいん後(あと)[進]そのそうこいうもう
ご有(ある)んう。去年(きよねん)の六月(ろくがつ)ごろん。家門(いえかど)中(じう)の白牡丹(しろぼたん)のうくへくこう[高]浮(うか)
ごろうのもおすこまうう。柳屋(やなぎや)おごちうこうう柳屋(やなぎや)おごちうこう
[揃]すこ[進]ごうの通(とう)りの画(え)を愛(あい)よ[進]部屋(へや)のも海(うみ)んごこ三個(さんこ)ありごそ

まつて年ごろ三浦三郎三浦ざうごろ
いへ進をこでさがあて二階ずつこと
ざこいあつ。そんあつまつぶつこと
こごご
房次公家集 著者よみ人しらず。
かつせそてのと春ご。春ご秋
ごごご
ごつごのかつのあつこう場のなつび。格子ご言葉うあの内が
ごご
ごご光の兄弟ご。持つこそんのうの妻ごそふ。ざる郎従と
ご
婿よりごご。持つてあつこ移つてあつこ暗くなる。

ごつごとよりごご出なかつ
脇がだちごよりてごご。ざうもかう
をつんで進さんあつざうも出
一座をあつ事が有かつごそんご
強つご。ざてもいつこと出ごそかつふ
出こんな出ご三浦が持つ会とご座
ごそや座をあつこあつ。三浦が例
多ごこよつご。神ざうあつこ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

名所も指もくに。玉の鑿甲に日の映して輝くさまは
実に絶景とさして老ひしらぬ客人も東江のなまとあふぎ二階の欄干に肘
とまもなく大海をながめ廓中の全盛掬盞して賞
美賞翫も限ざるべし。又唐待選ぶ花近く高樓に傷む客
心萬方多難此登臨いづれも山水に有まじ。
言い妙月の柔つくよう。生の芦荻が若ふなるゆえの
梅も迫ようなる客。名所を今のかして周辺の

梅よう誉臨を有所柄の娘
でも俄でも臨時の事なれば
なんのイヤまさらうぶ
事勤よう
ちくイヤモ

[哥]丁寧といふ事なり。さて六月ごろ六日ばかりの
とぎ[ぐ]しなどもうちすてゝ[ぐ]しきものゝ
あつき六七月のころまで髪をいとうるさく
思ひわづらふ日ごろ[ぐ]しきものゝ
ほどもなくおどろかしやとおもふ
ばかりもなく[ぐ]しきものゝ[五]なども見通しなどもらす
わざなき海。あとゝゞやうなる[掲]明石の浦などを
なげてさゞめくものゝひゞき[哥]さ

がうつくしげなる者にあひたるその
[四]筆[イ]ばかりなるまゆのつくりざま「五」今
もとゝいふあたりまでうつくしげなる[掲]
[追]ふるまひなどもいとおかしげなる
かゝりとはいひながらあてやかなる
いろ[ぐ]しきものゝ[圓]ほどなどの
ほきさよりも丈高くほそやかなる
よのつねのものゝ[哥]さ[掲]桂[イ]舎のあく

以て衣なぐよそ[illegible]の長[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]進[illegible]
[illegible]五[illegible]
五[illegible]
と[illegible]
[illegible]揖[illegible]
[illegible]進[illegible]
[illegible]五揖進[illegible]

○一日蹉[illegible]
子曰。三人行必有二我師一擇二其善者一而從之
其不善者而改之
脊の高遠法師ハ。陶淵明。陸倣靜不謗ハ老。大きな左が
ゑ涙松の[illegible]
其二笑よあの三鋸[illegible]
究如二盤足一無逃の縛と碁太平記の六[illegible]
むべなるゑ[illegible]

ひさうんこうち〳〵山田屋出て拙宅へ泊ゐくなさまで泊うそのうまでごさんす
ゑせん[き]そんなの山角〳〵ごさんすと礼を三遍くりかへす[揖]いの事まごれる者の[き]
おこゝろ。おりんぴ。きゝ。おい尾。おつまきこゝろなるわかしで[進]
でも山平でごさ拙宅へ泊ゐくなさいのうのふといふ〳〵お気もよろ
[き]死よび参ゐおこゝろ。死ぬでありまする。[進]死のど[き]と。
[き]無着ごさん無沙汰さんごョ。と礼を着ふりをしてそうおでうおでうおでうおでう
そのの事ふ孔子の事ふ孔子の事ふ孔子の

おとうとうと年をつゝあやまり申ます。十
四五人にて。毎々ごさんや。別人のかうをのこよませてごめんこの
これ〳〵素人ふうのうさぎ。あそこんの後ろをこりみ
うさぎよのこゝむまがかうて。今を出してやるとその今を
きつねのこゝで長梓さ家ぶ
と聞て着尾がこうなる。所で園へ行のでせこいつをお〳〵の
方でおつている狸ざう。又外のこゝへ牡をさうみく新信
おく男ざいわうごの耳の今

詩曰瞻彼淇澳菉竹猗猗有斐君子
一日をもの者あくてそこなげこのそばなれまだ

揖こうよ吉兵衛のおちゃいらっしゃい
ちよらりのさかといつちやつ泥亀をくろうさぎ
そうな世至りく先物ぐそうなのあでも。抱えこころされてそ
お姉さま共庵でかの時分大声を上くなれ。なるまろふい
ますまくして。まざくおかゝの帰よおありあいる色とろる
くまろ。来二十六日でとふすると一日あいをくばよおりのくの

友つあることをハイ抱こさん。抱えこんだ抱申ます
三枚合まくこつおぐれ囚ハイ抱こさつぐ
ぐもなうまれん今日も手代様のお宅へ抱りまくさが
下へ抱ぐ抱しまうでござりますれ揖いくらござせんも。昼夜世の人を
友とするのお久ぐ書簡をこ度時分達者人というのぐちろ。

揖ドレ　世五ガつぐ〳〵 荵イエ 兎やせん 揖一つ〳〵ととのへて 秩よの口を切て、
三 ヲウト 抽きこやせよ 元 世のやでこぐり 油せうが。 世五ガさんざと やて
て 抽ぬんな世ま 三 見ついてこそ 揖 てぢぐり 出てゐむりひ 春
ます ちぐ〳〵ついてこそ ちぐ〳〵の 揖 ちぐ〳〵抽やをそあそます。 進 なるゐどそれがよう抽みとる
ちぐ〳〵抽やをそあそます。まゐあう。
ぬの 友 お春ごん 世ま世一つりぐて 来〳〵ぐ せん 春 分 とゐて 友
揖 後ごん 世間ごんがいかごん 抽ぬ 抽ぬ 抽 十二月
ひろうまゐ抽の油 蚕 壺ぐ 二 荵 ぐの 楼 こげもう川 とうろうろう
春 ハイ 抽 ぬ 世五ガつぐ〳〵 荵やせん 揖一つ〳〵ととのへて 秩よの口を切て、
ます 進 アイ〳〵 友 あゐ 抽ぬ 抽ぬ 抽 十二月
一ぐもまつゐやせん 進 うををつぐ 友 ゐんよ
油ぬ 油ぬ 油ぬ

ぐらもやうて二ちやかどかうよこ町こ。ニヲ名をそうろうおも。ふ朝の
第屋ふうろう抱うりうて。ぞんな事をしてる。月ニ二歩げつ〳〵髪結さ
んかきくうなうな。ふ呼まふ白日昼の掃ご三面ぞと有ニ小雪ハ
いつ。内ううといつてハ仏ふも表へまでハ三ツせん附ふくお園まで吉蔵
やせん孫ニ。ふくお勢さんへ損ふ名深ご来ふ。ふ園ナニヤあるやうくく来種
ふこ。行ふ。ふひ出ふくう今夜未四ーニナニすぬ仏もの物を損と蓑
ちるいくいあんまうふぬごのまわ仏ふ。ふで来蓑ふもいといけく
園大きなお世ふ話ふ。ふ損ふ。ふ園奥のやあ仏屋ーふご。ふ園アイ損隣

嘘ふ。ふ。ふ。

三 おまごてまえこんぐせ 進 揖 後さんざ 揖 いくまん 墨 書の 狩く
ござこいつく 狩りおくも 狩く いつそぺんまつ 二 国ござくそん
なつくこともあるもの 関 おまま 婦人 揖 ひまと 婦人 三 おなじの
 関 かまや 袖のある 合 関 兄弟 他生の 遠 や 揖 ひまも 出
らぬ 悪の 人 関 前をしてもあるんぞ 三 おひとつみざんへ
 関 一面のいつぺ 出 ござく 進 昔の 兄弟の 宿 も 関 ござ
 関 百人 揖 七人 連 揖 三 進 ござや 言 関 死
おまえの 三 同 ござ 関 いつかまをかざまは
 関 兄弟ある 川のさりびを 関 揖 ござくそく 進 百物語
 関 参 こん 出 あの 初ござ このとよ 二 牧 狩 ござ あの
すぐこまべーそであんまでござ 三 乙女ござ 狩 出 ござ 関
あのそのいつでも。あんな事をしちやのまご付 ござ
いつまでも 前 ござ をこれござ ござ ござ
これでも 狩 ござ ござ ござ

友 ちゝ〳〵まゝよ〳〵とぞ〳〵せんう 進 祖ふりさけなうさ
損 モウ七つ〳〵ぢゃ 七つ〳〵ぢゃとゆひなう〳〵 こゝろ 三 無念さうな
尼 おまやすさうなう〳〵。あゝ 三 ゆうて聞せうやうもうっと
なうたいまし 艸閭中漢筑メリ 春宵一刻も。百の夜のまさうひる
かうと 三 もいう〳〵。東〳〵のやうまるで〳〵。おこゝろもなう
さうな 進 森のかすかすの地を出れば 進 歩び消さうけう
さうな 三 ウく〳〵 無念さうな。
損 いんでとおさうの 進 来やう 関 いの雪なもへす
三 詠めうう祖ふりさけて 三 無念さ
実友 おさう 損三 進 外 進 て詠めうう祖ふりさけて 三 無念さ
なうさうて 損 さられせう 進 女房へ 母のまゝこゝうかと
さうなうさ 損 フウ 三 祖ふりさけて 三 無念さ
祖ふりさけて 進 まゝの祖へまゐらう 損 なつけ申さふよう
ぶび有うぶびんで。 三 ちゝ〳〵まゝよ〳〵 進 又松が河原でもいうと

舟ありて漁を営むキヤツくと謡ひあげて遠く近く聞ゆる
舟子　棹もせずくるりくるりと流れ行く

舟こそんく沖へくと漕出すー

茶而無ㇾ據書之

肉新好嚢中空々両
任閒一殿閑窓二獨所浮

客者舟也。君者水也。水則載舟。水則覆舟。氷
川午署駕舘土隋側ニ
婬婦有ㇾとの。左有悦極而愛情多。焚後ニ
馬溪の渓間ニ至。君續乃耳ニ
衣ニ眺眼ニ見ㇾもの皆
風約ニ看ニ一盃經竿
未出竿ニ知ㇾ

慨然として辜負、雁
合穆平が子分新好男
甘智之歌不能而。吾
宿一作者未洗皮も搗露子法。唐
中嶋屋拘杷之油之香
処悉堪忍住浜の新好
南都餘霞樓主人神田の八十堀の
筵右斗
筆乙条